

# JCES ニュース

Japan Comparative Education Society

NO.13

## WCCES 第 13 回大会に出席して

会長 望田 研吾

9月2日から7日にかけて世界比較教育学会第13回大会がボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボにおいて、地中海比較教育学会を主催学会として開催されました。開会式におけるサラエボ大学哲学部長の挨拶の中での「かつて私たちはここで‘Dying together’を経験した」との言葉通り、まだ壁に無数の弾痕が残る建物が点在するサラエボは、第13回大会の全体テーマである‘Living Together: Education and Intercultural Dialogue’を重く、深く考えさせる地でした。大会最終日の総会では平和構築のための異文化間の対話と理解における教育の重要性を改めて確認した「サラエボ大会宣言」が満場一致で採択されました。この宣言採択は大会準備委員長のサラエボ大学アディラ・クレソ教授の強い希望によって実現したのですが、激しい民族紛争を体験したサラエボで宣言されたことにこそ大きな意味があると言えます。

この大会では日本比較教育学会を代表して、理事会と最終日の総会に出席しました。今回の理事会の最重要議題はマーク・ブレイ会長の任期満了に伴う会長選出でした。大会までに最終的に2名の候補者がノミネートされ、構成学会代表による無記名投票の結果、南部アフリカ比較教育学・教育史学会から推薦されたケープタウン大学教育学部のクレイン・ソディアン教授が第11代会長に選ばれました。アフリカ大陸から初めて選出された会長としての活動が期待されます。過去3年にわたって会長を務めてきたマーク・ブレイ教授は、それまでCIESやCESE大会時にのみ開催していた理事会をアジア比較教育学会大会時にも開くなどアジア志向の活動を展開し、ややもすれば欧米偏重の傾向があった世界比較教育学会の「多様化」に貢献するなど大きな業績をあげ、総会でも「歴史に残る会長」との称賛を受けました。

理事会におけるもう一つの重要議題は、次回2010年の第14回大会の開催地決定でした。大会前にはフランス語圏比較教育学会主催によるセネガルのダカールでの開催が内定していましたが、直前になってダカール開催がキャンセルとなり、理事会での議論の結果、2007年1月の香港での理事会時に開催の意図を表明していたトルコ比較教育学会によるイスタンブールでの開催提案を、2008年3月の理事会で審議のうえ承認することになりました。

今回のサラエボ大会には世界74カ国から600人以上の参加がありました。日本からは50人以上が発表や参加を行い、各国の中でも最大規模の参加者となりました。世界に向けて発信していく場としての世界比較教育学会はますます重要なものとなりつつあります。次回おそらくはイスタンブールで開催される第14回大会にも、多数の日本比較教育学会会員が参加されることを期待しております。

### 第44回大会のご案内

来年度の第44回大会は、東北大学で以下の要領で開催されることになりました。  
多数の会員の皆様にご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

連絡先：〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1

日 程：2008年6月29日(日)～6月30日(月)

東北大学大学院教育学研究科

会 場：東北大学 川内北キャンパス

日本比較教育学会

大会準備委員会委員長 宮崎 英一

第44回大会準備委員会事務局

## 第 43 回大会を終えて

筑波大学 窪田 眞二

本学会第 43 回大会を筑波大学で開催させていただき、会員及び臨時会員の参加者が 412 名を数えるという、おそらく過去最大規模と思われる大会になりました。会員外のスタッフと公開シンポジウムのみ参加者を加えると 500 名を超えたと思われま

す。自由研究発表の件数は 144 件、ラウンドテーブルも 6 企画で行われました。また、国際交流委員会からの発案で、受付付近における写真の展示、懇親会場での海外研修のプレゼンテーションなど、新しい取組もできました。その懇親会の参加者は、約 280 名でした。準備委員会として、参加者、大会準備にご協力いただいた会員、そして後援を頂いた茨城県とつくば市の教育委員会に厚く御礼申し上げます。

自由研究では、英語によるセッションを今回は 2 日間で計 4 部会設定したところ、各会場とも留学生や外国人研究者を含めて多くの参加者を得て、議論も活発に繰り広げられていました。自由研究の部会設定では、初めて地域や国名を部会名に用いることなく、「宗教と教育」「企業と教育」「開発と教育」「ジェンダーとマイノリティ」など問題領域のキーワードによる部会と「初等・中等教育」「高等教育」など教育段階による部会で、2 日間で計 32 部会を設定しました。

課題研究は、研究委員会企画の「オルタナティブ教育の国際動向」と大会校企画の「国際教育協力における日本型教育実践の応用可能性」と題して行われました。背中合わせのような 2 つの会場でしたが、参加者が偏ることもなく、報告者によるすばらしいプレゼンテーションが展開され、懇親会では両企画に対する高い評価を頂いております。

公開シンポジウムは、「これからの子どもたち

に求められる力を探る－日本におけるシティズンシップ教育の可能性」と題し、日本の実践例として品川区独自の「市民科」の実践について同区課長の藤森克彦氏に、「シティズン・リテラシー」の育成とカリキュラム開発について東京学芸大学の成田喜一郎氏にそれぞれご報告を頂き、諸外国の事例としてイギリスの事例は新井浅浩会員に、カナダの事例は岸田由美会員に、中国の事例は姜英敏会員にそれぞれご報告を頂きました。シンポジウム開始時点で 300 部用意した資料が足りなくなり、急遽追加印刷をしましたが、収容定員 350 名の会場には立ち見が出るほどでした。このテーマへの関心の高さをあらためて認識した次第です。

お詫びしなければならないのは、今回宅配業者に委託したプログラム送付で、発送してから配達されるまで 10 日以上かかった地域もあり、ご心配をおかけしたこと、そしてこの件で会員に緊急連絡をした際に、メールアドレスを非公開にしていた会員にも送信するなど、ご迷惑をおかけしたことです。本当に申し訳ありません。

筑波大学の大学院生（とりわけ比較・国際教育学研究室）を中心に 40 名を超えるスタッフで、「人にやさしく」をテーマに、参加者の皆さまが十分参加目的を達成できるように準備と当日の対応に当たってきました。スタッフは、各自の担当だけでなく、全体を見通した動きをしてくれていたと思います。比較・国際教育学研究室の博士後期課程の院生は全員が自由研究発表にもエントリーしながらの大会準備という厳しい条件を自らに課していました。大会準備を通じて、皆がひとつ成長したような、そんな印象を強く持っています。



## 世界の比較教育学研究・教育拠点：ボストンカレッジ国際高等教育センター

センター長 フィリップ G. アルトバック

ボストンカレッジ国際高等教育センターは、高等教育機関のアドミニストレーション分野におけるネットワーク活動や研究、研修を通じて世界中の大学にむけてユニークなサービスを提供しています。その基本目的には、ボストンカレッジにおける国際高等教育の拠点形成、世界の200以上のイエズス会系大学間リンクの提供、国際高等教育分野の研究能力構築が含まれます。

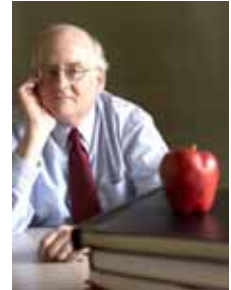
フォード財団などからの潤沢な資金を基に、センターは次のような活動に取り組んでいます。「季刊ニューズレター *International Higher Education* の発行（電子媒体でも公開）」「センターの研究活動を反映した国際高等教育に関わる書籍の刊行と、途上国の研究者への無料配布」「海外からの訪問研究者の受け入れ」「高等教育に関する国際コンファレンス開催」「世界の（特に途上国の）研究者のための文献目録や資料サービス」「賞を獲得し、世界銀行高等教育部門のリソースガイドとして特集されたウェブサイトの後援」「国際高等教育に関わる諸問題についてのオリジナルな研究を特集したシリーズ本刊行の後援」「世界の高等教育に影響を与える中心問題に関する主要研究者や政策立案者の対話を収録したポッドキャストシリーズのサポート」「ボストンカレッジ博士課程学生への経済支援や研究機会の提供」

現在、センターは以下の4つの主なプロジェクトをサポートしています。

### 1. アフリカ・イニシアティブ (Africa Initiative)

1999年より、センターはアフリカ大陸における高等教育研究の発展、書物の刊行、支援に重要な役割を担ってきました。その主な成果は、賞を受けた *African Higher Education: An International Reference Handbook*, Indiana University Press, 2003 の刊行、過去例を見なかった定期刊行物 *Journal of Higher Education in Africa* の刊行開始、さらにウェブサイト上でのリソースセンターである the International Network for Higher Education in Africa (INHEA) の開設などです。

アフリカ・イニシアティブは、アメリカの主要6財団によるコンソーシアムである「アフリカの高等教育のためのパートナーシップ」の支援を受けています。



### 2. 国際高等教育情報センター (International Higher Education Clearinghouse :IHEC)

IHECのウェブサイトは、国際高等教育分野の研究者や実務者を対象に主要問題に関する情報源提供のために設立されました。論文、報告書、文献目録、オンライン・ニュースやニューズレターなどへのリンクを備えており、利用可能なウェブ上のリソース検索にとってパーフェクトな出発点となっています。

IHECのウェブサイトは、国際高等教育分野の研究者や実務者を対象に主要問題に関する情報源提供のために設立されました。論文、報告書、文献目録、オンライン・ニュースやニューズレターなどへのリンクを備えており、利用可能なウェブ上のリソース検索にとってパーフェクトな出発点となっています。

### 3. 高等教育における腐敗モニター (Higher Education Corruption Monitor :HECM)

アカデミックな腐敗は、多くの高等教育制度が直面するますます重要な問題となっています。HECMの目的は、高等教育における腐敗に関する資料をこの問題に関心を持つすべての人々に提供するとともに、情報交換のためのフォーラムとして機能することです。特にHECMは世界中の情報源に拠る最近のニュース記事へのオンラインアクセスを提供しています。また、高等教育における腐敗に関する出版物一覧や、この問題を取り扱う機構、教育機関、団体へのリンクもあります。

### 4. 国際高等教育ポッドキャスト・イニシアティブ (The International Higher Education Podcast Initiative)

ポッドキャスト・イニシアティブは、世界の主要な高等教育のリーダーや論者の言を、文章では不可能なだけな雰囲気や対談調で世界中の視聴者に向けて発信するもので、世界中の政策立案者や研究者にとって役立つ高等教育に関わる広い範囲のテーマを取り扱っています。

## 「サラエボ・サバイバル・マップ」

国際交流委員 澤野由紀子（聖心女子大学）

今回の世界比較教育学会大会の運営は、サラエボ大学哲学部教育学科のスタッフと学生たちが1年以上前から関わっていたという。揃いの黄色のTシャツを着た学生たちのなかには、スカーフを巻いたムスリムの女子学生もおり、多民族・多宗教の学生たちが仲良く一生懸命働いている姿が印象的であった。

開催地であるボスニア・ヘルツェゴヴィナのサラエボは、「共に生きる：教育と異文化間の対話」をテーマとした国際学会には恰好の地であるが、90年代の悲惨な戦争のイメージが人々の心のなかにまだ強く残っている。日本では当時の旧ユーゴ情勢に関する情報量が比較的少なかったため、サラエボ包囲に関する詳しい知識をもって今回の大会に臨んだ会員は少なかったのではないだろうか。筆者も戦車の絵で包囲網を示す当時の「サラエボ・サバイバル・マップ」がインターネットからダウンロードできるようになっているのには驚いた。気がつけば、今回の大会会場となっていたホリデイイン・ホテルとサラエボ大学哲学部の建物のそばにある通りの通称は「スナイパー（狙撃兵）通り」。周囲の高層ビルに忍び込んだスナイパーが、歩いている市民を無差別に狙撃した大通りであった。当時ボスニア難民などを積極的に受け入れ、国連を通じて支援も行っていた欧米の人たちにとっては、未だその記憶は生々しいものであるにちがいない。この戦争そのものが、欧米諸国や国連によるスロベニア、クロアチア、ボスニア等の早すぎる独立承認によって引き起こされたとなれば、気持ちは重くなる。

その意味で、大会4日目の夕方に企画された学校訪問は、大変意義深いものであった。訪問したのは、サラエボ市内のドブリーニャ地区にあるオスマン・ヌーリ・ハジッチ基礎学校であった。ボスニアの小学校を一目見たい、という軽い気持ちで参加した人

も多かったと思うが、校長と学校心理士から伺った戦時下の同校の教育実践に関するお話しは想像を超えるものであった。空港に隣接する同地区は、セルビア軍からの猛攻を受け、補給路として秘密のトンネルが作られるまでの数ヶ月間、完全な封鎖状態が続き、包囲下のサラエボの中でも最も悲惨な地域であったという。

アメリカ政府の支援によって再建された新しい校舎のなかで、校長先生は当時の様子を振り返り、教育活動を共に続けた教員らを自らの戦友として紹介した。旧ユーゴの戦時下の学校の教育実践に関するケーススタディを行っているピッツバーグ大学のデイビット・バーマン准教授が、さらに解説を加えた。世界中の教育学者を前に当時の経験を思い起こし、戦時下の「英雄」である教員たちは、あふれる涙を抑えられないようだった。

「共に生きることを学ぶ (learning to live together)」はユネスコの『学習：秘められた宝』（1996年）が提唱する生涯学習の4本柱の一つである。だがまず、こうした事実を知らなければ共に生きることの重要性を実感することはできない。「知ることを学ぶ (learning to know)」こそが、平和構築を目指す比較教育学の基礎・基本でなければならない。

（紙面の制限より、事務局でご報告の一部割愛させていただきました。オリジナル版はHP上で公開予定です）

お知らせ

会則の改定、倫理綱領の制定について  
第 43 回大会（筑波大学）総会において、倫理綱領の制定が決定されましたので、お知らせいたします。

### 日本比較教育学会倫理綱領

（平成 19 年度総会制定）

1. 日本比較教育学会は、会則第 6 条の規定に基づき、学会としての社会的責任の明確な履行、並びに会員による研究の公正性の確保を目的として、この倫理綱領を定める。
2. 会員は、研究の実施にあたっては、法令等を遵守するとともに、調査地の文化、宗教、慣習を尊重する。会員は、自身並びに研究に関わる者の安全に留意する。
3. 会員は、研究の実施にあたっては、情報提供者に対して、その人権を最大限尊重し、身体的、心理的、社会的な危害を加えることがないように留意する。
4. 会員は、研究の実施にあたっては、情報提供者に対して当該研究の目的、研究経費の財源、研究成果の公表方法等について明確に説明する。
5. 会員は、研究の実施にあたっては、情報提供者のプライバシーを尊重し、個人データ等の秘密を厳守する。
6. 会員は、研究の実施にあたっては、資料、データ等の捏造、改ざんを行わない。会員は、研究の独創性および他者の著作権等の知的財産権を尊重する。

付記

1. 本綱領は平成 19 年 6 月 30 日より有効とする。

#### 【学会会則の改正】

##### 第 2 章 第 6 条

会員は本会の行う事業に参加することができる。会員は別に定める日本比較教育学会倫理綱領を尊重する。

#### ● 訃報

本学会の元会長原田種雄氏(享年 95 歳)が平成 19 年 9 月 23 日に御逝去されました。

ご冥福をお祈りするとともに、ここに謹んでお知らせいたします。

### 第 18 回平塚賞応募作品の募集

平塚賞運営委員会は今年度も下記の要領で第 18 回平塚賞の候補作品を募集します。自薦・他薦を問いません。ふるってご応募下さい。応募要領の詳細は日本比較教育学会ホームページの記載をご覧ください。

なお、「平塚賞規定」を一部改正しましたので、ご注意下さい。

○対象作品：2007 年 1 月～12 月に公刊された比較教育学に関する著書・論文

○応募要領：本学会ホームページ掲載の「平塚賞候補著書・論文推薦書」に必要事項を記入し、当該著書・論文 1 部とともに提出すること。

○締切：2008 年 1 月 15 日（必着）

○送付先：

〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1

東北大学大学院教育学研究科内

日本比較教育学会・平塚賞運営委員会

委員長 官腰英一 宛

TEL&FAX : 022-795-6130

問い合わせ先 : [miyakoshi@sed.tohoku.ac.jp](mailto:miyakoshi@sed.tohoku.ac.jp)

### 新入会員

（2006 年 2 月～2007 年 9 月、入会申込み順）

- 館林 保江（中央大学大学院生／国立教育政策研究所 研究協力者）  
 廣内 大輔（広島大学大学院生）  
 小松 太郎（九州大学大学院言語文化研究院）  
 出村 さやか（日本大学大学院生）  
 平中 里弥（東北大学大学院生）  
 平山 雄大（早稲田大学大学院生）  
 小坂 法美（広島大学大学院生）  
 Murni Ramli（名古屋大学大学院生）  
 河内 真美（筑波大学大学院生）  
 岡本 聡子（㈱システム科学コンサルタンツ）  
 田中 伸幸（神戸大学大学院生）  
 隼瀬 悠里（京都大学大学院生）  
 林 真樹子（早稲田大学大学院生）  
 奥村 真司（湘南短期大学）  
 小川 洋（聖学院大学）  
 内海 悠二（早稲田大学大学院生）  
 京免 徹雄（早稲田大学大学院生）  
 萩森 直子（東京大学大学院生）  
 山岸 直司（東京大学大学院生）  
 余語 豊彦（神戸大学大学院生）  
 松永 亜弓（神戸大学大学院生）  
 中原 みゆき（神戸大学大学院生）  
 金 大現（釜山大学）  
 柳 希妊（釜山大学大学院生）  
 玉 定恩（釜山大学大学院生）  
 朴 宣泳（釜山大学大学院生）  
 李 秉峻（釜山大学）  
 安 京植（釜山大学）

Chung, Min-Young (釜山大学大学院生)  
 Chung, Ae-Ree (釜山大学大学院生)  
 韓 銀正 (釜山大学大学院生)  
 韓 大東 (釜山大学)  
 韓 貴女 (釜山大学大学院生)  
 朱 哲安 (釜山大学)  
 姜 梨花 (釜山大学大学院生)  
 姜 成珍 (釜山大学大学院生)  
 Kim, Hoy-Yong (釜山大学)  
 金 阿英 (釜山大学大学院生)  
 金 智熙 (釜山大学大学院生)  
 Kim, Young-Hwan (釜山大学)  
 Kim, Su-Hyun (釜山大学大学院生)  
 李 炫英 (釜山大学大学院生)  
 李 雨泰 (釜山大学大学院生)  
 李 奈映 (釜山大学大学院生)  
 Lee, Hyun-Ah (釜山大学大学院生)  
 関 守英 (釜山大学大学院生)  
 文 美燻 (釜山大学大学院生)  
 朴 清美 (釜山大学大学院生)  
 朴 慧蘭 (釜山大学大学院生)  
 徐 鏞喜 (釜山大学大学院生)  
 Sim, Hae-Sook (釜山大学)  
 Yoo Soonhwa (釜山大学)  
 Yoon, Na-Ri (釜山大学大学院生)  
 金 東光 (釜山大学)  
 朴 東燮 (釜山大学)  
 栗原 真孝 (早稲田大学大学院生)  
 宮石 建治 (米国大使館)  
 尹 敬勲 (立正大学 非常勤講師)  
 津吹 直子 (大阪大学大学院生)  
 戸井 敦子 (東京工業大学大学院生)  
 鵜飼 明香 (名古屋市立大学大学院生)  
 曾我 幸代 (聖心女子大学大学院生)  
 山本 貴之 (東京大学大学院生)  
 佐々木 宏 (広島大学)  
 仲座 栄利子 (沖縄キリスト教短期大学)  
 我妻 鉄也 (桜美林大学大学院生)  
 荘所 真理 (神戸大学大学院生)  
 渡辺 一雄 (玉川大学)  
 志水 麻理 (神戸大学大学院生)  
 伊藤 喬治 (名古屋大学大学院生)  
 寺田 佳孝 (名古屋大学大学院生)  
 大佐古 紀雄 (育英短期大学)  
 田中 達也 (大阪市立大学大学院生)  
 萩巢 崇世 (名古屋大学大学院生)  
 畠山 勝太 (神戸大学大学院生)  
 堀尾 藍 (博士後期課程進学準備中)  
 杉山 浩二 (静岡大学大学院生)  
 Park, Young-Sug (釜山大学)  
 武 小燕 (名古屋大学大学院生)  
 青木 哲生 (神戸大学大学院生)  
 大森 史子 (神戸大学大学院生)  
 長根尾 和子 (神戸大学大学院生)  
 Diljune Etpison (神戸大学大学院生)  
 ライトウ 山崎 晴世 (桜美林大学大学院生)  
 長山 道代 (早稲田大学 (嘱託職員))  
 利根川 佳子 (神戸大学大学院生)  
 Lizzie Wallace Kakutu Chiwaula  
 (神戸大学大学院生)

矢野 ルシアネ・パトリシア  
 (名古屋市立大学大学院生)  
 辻野 けんま (京都府立大学大学院生)  
 勝 福代 (広島工業大学 (職員))  
 梅宮 直樹 (独立行政法人国際協力機構)  
 (2007年9月15日現在の会員数 924名)

### 奮って紀要第37号に投稿を！！

紀要編集委員会は現在第36号の編集作業を鋭意進めています。次号の自由投稿論文については平成20年1月10日が投稿締め切り日です。会員の皆様にはふるって投稿くださいますよう、ご案内申し上げます。

#### 【原稿提出先】

〒739-8524 東広島市鏡山1-1-1  
 広島大学大学院教育学研究科内  
 日本比較教育学会紀要編集委員会  
 委員長 大塚 豊 宛

なお、投稿に際して、以下の投稿要件にとくにご注意ください。

- \* 共同執筆の場合、執筆者全員が本学会の会員であること。
- \* 投稿要領3原稿規格の(1)を厳守すること。
- \* 注、引用文献、参考文献の全てを本文と同一のフォントサイズ及び行数で印字すること。
- \* 図・表中の文字はA4判の原稿の70% (A5判) に縮小しても十分に読めること。

(紀要編集委員長 大塚豊)

### 会費納入のお願い

年会費未納の方は納入にご協力をお願い致します。通常会員10,000円、学生会員6,000円です。紀要は年2回発行ですが、本学会では当該年度の会費納入を確認後、学会紀要『比較教育研究』をお送りしています。3年を超えて会費未納の方は会員資格を失います。

【郵便振替口座】 00820-6-16161

日本比較教育学会事務局

〔銀行口座〕 福岡銀行箱崎支店

普通 2102191

日本比較教育学会 一般会計

※銀行振り込みにより納入される方は、入金の際に事務局までご一報下さいますよう、お願い申し上げます。

### 日本比較教育学会事務局

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1

九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門

Tel&Fax (092) 632-8426

E-mail jces-edu@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

<http://www.soc.nii.ac.jp/jces/index.html>